

山城はこんなに面白い

ただの山ではない山城を知ろう

「県内には700以上の山城があったといわれ、その土地ごとの地形を生かすように、さまざまな構造のものが造られました」

土佐史談会の会長で、県立歴史民俗資料館の前館長でもあった宅間一之さんに、山城の魅力について語ってもらった。

「地域に住む方に山城について尋ねると、こんな言葉を耳にします。『昔は城があったらしいけど、今はなんちゃあない。ただの山よ』。でもそれは建物がないだけのこと。山城は山そのものが城です。山城跡には現在も、曲輪・堀・土塁といった遺構が残されています」

遺構は山林と化し、山城跡を眺めても普通の山にしか見えない。しかし、山城が実際に機能していた当時、木は防衛のために伐採されていたという。山を覆う木々がなかったと考えると、山の印象は一変し、戦に備えた防衛施設としての姿をとらえることができる。

「領地を守るためには、何より見渡しが良くなるのはなりません。そして、木のない切り立った斜面から丸太や石を転がし、攻め入ってくる敵を防いでいたはずですよ」

山中に明らかに人の手で造られたと思われる構造物があり、それぞれに『戦う城』としての機能があった。山城を構成する曲輪や堀や土塁が、どのような目的をもって造られ、どのように使われてきたか。当時の城主の気持ちになって、その戦略や外敵の脅威などを考察することこそ、山城を楽しむポイントだという。

「例えば、なぜこの場所に堀を掘ったかと考えてみる。尾根伝いに侵入してくる敵を足止めするためだろうか。山城の構造に反映された城主の考え方に思いをはせな

山城の遺構に立って想像してみよう。その昔、この場所で繰り広げられた戦いを。



1 長宗我部氏の居城・岡豊城から山田の地を望む。互いの居城をにらみ合う位置にあった 2 楠目城の登城口には案内板が立てられている。市指定史跡に指定されており、民有地でもあるので見学には配慮を



土佐史談会 会長
宅間一之さん インタビュー

から、攻防戦の様子などを想像すれば、山城跡を巡るフィールドワークはグッと面白みを増します」

県内屈指の山城・楠目城の魅力
山城の専門家ともいえる宅間さんにお墨付きをいただいた。

「まず目を奪われるのは、二ノ段の北に掘られた堀切です。集められた農民たちが、どれだけの労力を費やしてこの大工事を成し遂げたかと想像すると言葉が出なくなりますね。そして、詰や二ノ段の曲輪には虎口がはつきりと残り、大規模な土塁がぐるりと囲んでいます。中世の山城としての遺構が非常に良く残っており、ここにくれば山城の構造が全て分かるという教科書のような城跡です」

とした上で、こんなお話も聞かせてくれた。

「落語家の春風亭昇太さんは大の城好きとしても有名ですが、今年の4月に来高した際、楠目城を案内する機会がありました。すごく喜んでくれて、この山城は一級品ですねと絶賛していましたよ」

史跡を守り生かしていくために

「歴史的な物語とともに楠目城の遺構を紹介すれば、観光面でも非常に魅力的な場所となるのではないのでしょうか」

最後に宅間さんからこのような言葉をもらった。

「平成23年度から平成24年度にかけて、県立歴史民俗資料館が企画した歴史散策のバスツアーは、大きな人気を博しました。地産地消型の『食』とともに中世の山城跡を訪ねる旅でしたが、『今はなんちゃあない』はずの山に多くの人を呼び込みました。身近な場所に誇るべき歴史的な史跡があるというのを知ってほしいですね」

楠目城の これからを考える

特集『戦国時代香美史伝』いかがだったでしょうか。かつて香美の地を治めた山田氏の物語と、楠目城の魅力についてお伝えしてきました。

教育委員会では、楠目城の管理と保存、そしてさらなる活用について検討するため、香美市史跡楠目城跡整備等検討委員会を新たに発足させました。

この中で、専門家の指導や地域の方の協力をいただきながら、楠目城跡をより良いかたちで未来に残すためにはどうすればよいか、検討を進めることとしています。

また、観光資源として有効活用を図るなど、文化財としての付加価値を高めるための施策も考えていきます。

宅間一之さんのインタビューにもあるように、「今はなんちゃあない」と思われている場所に、実は多くの人々を集める魅力が潜んでいます。この魅力を際立たせるための方法を、今後じっくりと探っていきたいと思います。

実はすごかった楠目城。
その魅力を再発見！
香美市の歴史を巡る旅は
これからも続く…

